

みんなでダンス
— in ibaraki —
プロジェクト

森田かずよさん 

R7年度 公演記録

みんなで つくるダンス公演

『そこから、これから、はぐくまれしもの』

2025年12月6日

@ 茨木市市民総合センター(クリエイトセンター)
センターホール



森田かずよさん 

みんなで つくる

ダンス公演

障害のある人もない人も一緒に踊ろう



関西から



文化庁委託事業「令和7年度障害者等による文化芸術活動推進事業」

発行：公益財団法人茨木市文化振興財団

2021 — 2025
5 年間の軌跡

5年間の軌跡+R7年度 公演記録

これまでを 振り返って

2020年度から始まった

「みんなでダンス in Ibaraki」プロジェクト。

うまくいくことも、いかないことも、大切に抱えながら歩んできた5年間。
財団職員の視点で年度ごとに振り返ります。



はじめに

2017年に制定された文化芸術基本法に「年齢、障害の有無又は経済的な状況にかかわらず等しく文化芸術の鑑賞等ができる環境の整備」が謳われ、2018年には「茨木市障害のある人もない人も共に生きるまちづくり条例」が施行され、さらに「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律（障害者文化芸術推進法）」が制定されました。

そうした流れの中で2019年、夏の暑さが続く9月のある日、追手門学院大学の草山太郎先生と当財団・事業統括の落合が、茨木市市民文化振興課の仲介で出会い、このプロジェクトは動き始めました。2020年にワークショップがスタートし、翌2021年にはダンス公演が実現、以後継続し5回を数えるに至りました。

この期間、森田かずよさんを筆頭に、「ダンス」をキーワードに、様々な人々がこのプロジェクトに参加しました。途中からは、音楽や衣装、舞台美術など、踊らない分野でもアーティストや市民が参加できる取り組みも進めました。

2019年から数えると7年。その間、私にとっては自分自身や人、社会を見る視点が変わり、視野が広がる日々の繰り返しでした。参加した方々にとっては、成長する場であったり、その逆で変わらずにいられる場所であったり、様々ですが、「自分の居場所」と思われる場づくりを、これからも続けていきたいと思います。

2026年3月

公益財団法人茨木市文化振興財団・常務理事
落合佳人

5年間の歩み

みんなでダンス in Ibaraki プロジェクト (2021-2025)

2020年度

「できる形」を探る

障害の有無や背景の異なる人々が共に参加するインクルーシブな事業に初めて取り組んだ年。コロナ禍で活動が制限される中、「無理なく続ける形」を模索し、オンライン併用・非接触形式のワークショップ(以下、WS)を実施。感染対策や職員研修を通じ、以降の公演づくりにおける「安心への配慮」を共有する土台を築いた。

色々な年代の方と身体で表現しあうことで、心の距離も近づいた気がしてとても楽しかったです。(2020 | 参加学生)

【実施内容】身体表現ワークショップ
【日時】2020年11月15日(日)10時～12時
【参加】22名(うち学生8名)
【連携】追手門学院大学 地域創造学部 草山ゼミ
茨木市立障害福祉センターハートフル

舞台上で楽しんでいたことがお客様に伝わっている手ごたえは感じました。(2021 | 参加者)

「年を取っても楽しいことがある」ことを伝えたいです。若者たちと一緒に汗を流している姿を見てほしい。(2021 | 参加者)

2021年度

初めての舞台公演

初めて「みんなでつくるダンス公演」を実施した年。誰かの動きや感覚に反応することが表現になるという実感を参加者同士で共有した。公演後のトークでは実践を振り返りながら次につながる問いと希望が語られ、プロジェクト継続への手応えが得られた。

【実施内容】①ダンス公演「そう、それはいつか繋がるレカのお話」②講演・トークセッション:吉野さつき(愛知大学文学部 現代文化コース メディア芸術専攻 教授)
【日時】2021年12月5日(日)14時開演
稽古:9～11月(全12回)
【参加・鑑賞】参加32名(うち学生12名)/鑑賞162名
【鑑賞サポート】字幕対応・手話通訳
【その他】オンラインとのハイブリッド形式
ゼミ取組発表会
【連携】追手門学院大学 地域創造学部 草山ゼミ
【フライデザイン】藤原優希(追手門学院大学)
【出演者】〈一般公募〉みえこ、はな、たけ、かわちい、みお、ミツヲ、じゅりあん、りさ、ダンさん、あや、ゆか、まゆちゃん、あず、ひでみ、びーちゃん、みるちゃん、あこ、ノブ、あやのん、しんちゃん
〈学生〉タティ、ゆうま、あさみ、なおき、ゆき、あやか、みずき、つばさ、よっしー、こうた、ともや、こうすけ

障害の有無に関係なく交流する地域が増えれば良いと思う。少しずつ皆の意識を変えていくことができるんじゃないと思う。(2021 | 参加者)

少しだけど、心の良い栄養を蓄えたと思います。自分のペースで成長して実感? (2022 | 参加者)

二人組で動くというときに、あうんの呼吸でリーダーが変わるところがとても楽しかった。(2023 | 参加者)

心の良い若者が大勢いて嬉しい。(2022 | 参加者)

2022年度

公演を重ね、表現が深まる

前年の経験を踏まえ、WSと公演を継続実施。世代を超えた参加により表現の多様性が広がった。大学生は出演に加え、演出、進行補助など運営面でも関わり、プロジェクトを支える担い手としての役割が明確になった。

【実施内容】①ダンス公演「トワニミライ」②森田かずよソロダンス「shape of my body」③講演・トークセッション:大澤寅雄(株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 主任研究員)、森隆一郎(合同会社 渚と)
【日時】2022年12月3日(土) 14時開演
稽古:9～11月(全12回)
【参加・鑑賞】参加者41名(うち学生21名)/鑑賞97名
【鑑賞サポート】手話通訳・要約筆記
【連携】追手門学院大学 地域創造学部 草山ゼミ
【WS記録写真】茨木美術協会(中濱正善、浦谷光)
【舞台写真】松本成弘
【フライデザイン】藤原優希
【ダンスアシスタント】安藤真弓

【出演者】〈一般公募〉あやのん、乾光男、入夏夏帆、かな、神代千穂、河内千春、高嶋華帆、高嶋勇太、たかちゃん、sayosayo、田中敦子、谷裕美、寺本悠莉、中野美留希、原志緒里、モモネ、ゆか
〈学生〉あゆな、こうた、ともき、あおい、あみ、あやか、かっさー、ここ、こと、たける、なつはる、まさちか、まほ、もも、ゆう、ゆうと、りな、りょうすけ、るり

2023年度

プロジェクトとしての輪郭が立つ

文化庁「令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業」採択。「みんなでダンス in Ibaraki プロジェクト」として再編した年。公演と単発WSを軸に構成。記録映像上映会を通じて創作プロセスを地域と共有した。大学ゼミとの連携を強化し、鑑賞サポートや運営面での関わりも広がった。

【実施内容】①ダンス公演「だから、あなたと奏でるカラダ」②講演・トークセッション:大澤寅雄(株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 主任研究員)、森隆一郎(合同会社 渚と)
【日時】2023年12月3日(日) 14時開演
稽古:9～11月(全12回)
【参加・鑑賞】参加38名(うち学生17名)/鑑賞123名
【鑑賞サポート】手話通訳、要約筆記、点字資料作成、音声ガイド、字幕、事前鑑賞ツアー
【連携】追手門学院大学 地域創造学部 草山ゼミ
【WS記録写真】茨木美術協会(中濱正善、浦谷光)
【舞台写真】井上嘉和(株)井上写真事務所
【宣伝美術】本村信裕(STUDIO GIGI)
【ダンスアシスタント】安藤真弓、乾光男
【音楽】かんのとしこ(アコーディオン奏者)
【出演者】〈一般公募〉K.J.あかねちゃん、あやのん、いくちゃん、かおり、かず、衣笠音音、古閑弘道、佐藤悦子、佐藤晃大、しおり、たっくん、田中敦子、たにゆみ、べっぴんchan、ミー、みるちゃん、ゆか、吉田しほ
〈学生〉あおい、あみ、あやか、かっさー、ここ、こと、たける、なつ、はる、ひなた、まさちか、まほ、みほ、もも、ゆう、ゆうと、るり
【記録映像上映会】2024年2月3日開催 / ドキュメンタリー上映会+トークセッション / 登壇:久保田テツ(大阪音楽大学)、大澤寅雄(合同会社文化コモンズ研究所代表)、森田かずよ、草山太郎 / ファシリテーター:森隆一郎 / 入場65名 / 映像制作:久保田テツ(大阪音楽大学)
【単発WS】年間6回:6/10、7/5、8/12、2024/1/28、2/3、3/16

2024年度

踊る以外の参加をひらく

文化庁「令和6年度 障害者等による文化芸術活動推進事業」採択。踊ることに限らない多様な参加のかたちが大きく広がった一年。衣装制作や手づくり楽器、ファッションショーなど、創作を支える役割が可視化された。救護体制や事前鑑賞ツアー、アウトリーチも実施し、公演前後を含めた体験として事業を設計した。

95歳の方のソロダンスがとても素晴らしいかったです。(2024 | 観覧者)

2025年度

対話を含めた継続のかたち

文化庁「令和7年度 障害者等による文化芸術活動推進事業」採択。5年目の節目として、創作・上演に加え、評価検証や対話の場を通して実践を言葉にするフェーズへと進んだ年。舞台美術制作や「踊らない参加」が確かな入口となり、次の展開へ向かう足場が確認された。

いつも練習に来ると心がポカポカしました。(2025 | 参加者)

【実施内容】①ダンス公演「公園(パーク)でルンバ〜おしゃべりな身体と踊るひととき」②森田かずよソロダンス ③講演・トークセッション:アサダワタル(アーティスト・文筆家)

【日時】2024年12月8日(日) 14時開演
稽古:9~11月(全12回)

【参加・鑑賞】参加23名(うち学生2名) / 鑑賞163名

【鑑賞サポート】手話通訳、要約筆記、点字資料作成、字幕、事前鑑賞ツアー

【連携】追手門学院大学 地域創造学部 草山ゼミ、茨木障害フォーラム
【WS記録写真】茨木美術協会(中濱正善、浦谷光)

【舞台写真】井上嘉和((株)井上写真事務所)

【宣伝美術】本村信裕(STUDIO GIGI)

【映像記録】久保田テツ(NPO remo・記録と表現とメディアのための組織)

【救護】とと、うし

【ダンスアシスタント】安藤真弓、乾光男、藤原美加

【出演者】〈一般公募〉アヤ、あやのん、岩原帆南、かおり、垣見ゆき子、かほ、河内千春、衣笠百音、くーちゃん、草山太郎、古閑弘道、sayosayo、レーちゃん、しおり、じゅりあん、じゅんこ、田中敦子、たにゆみ、とも、浜田きよみ、みるちゃん、ゆか、よいちゃん
〈学生〉ひなた、ゆーが

【手づくり楽器演奏】監修:西本諭史(パーカショニスト) / 入江風大、衣笠咲子、はいちゃん、ヒロミ

【衣装】監修:藪内美佐子(美術家) / プロジェクトマネジメント:雨森信 / 制作:藪内美佐子、ibabun手芸部:あき、あけみ、一宮、かめちゃん、くーちゃん、さっちゃん、ジュリ、てるみ、とみちゃん、中原郁子、HIRO、マヨ、ミツヨちゃん

【ibabun手芸部】2025年3月22日(土) / ファッションショー監修:ファッションショー 藪内美佐子 / ダンス監修:森田かずよ / 出演:みんなでつくるダンス公演ダンサーおよびibabun手芸部有志 / プロジェクトマネジメント:雨森信

【単発WS】年間8回:4/20、5/19、6/22、7/13、8/17、1/25、2/22、3/22 〈アウトリーチ〉1/18:マイウェイ福祉の会「ワークきらり」

2021年度

『そう、それはいつか繋がる
ダレカのお話』

2021年12月5日(日)

2022年度

『トワニミライ』

2022年12月3日(土)

2023年度

『だから、あなたと奏でるカラダ』

2023年12月3日(日)

2024年度

『公園(パーク)でルンバ〜
おしゃべりな身体と踊るひととき』

2024年12月8日(日)

2025年度

『そこから、これから、
はぐくまれしもの』

2025年12月6日(土)

受け止める→誰にでもできる少しのこと=行動する。(2025 | 観覧者)

茨木市が色々な人がすみやすい町になると思う！(2025 | 参加者)

表に出ることが苦手な障害のある方や家族、引きこもりがちな方などが、ダンス以外で関われる部分ができると更に広がるかも・・・(2025 | 関係者)

茨木市はすごいです。この企画を5年！いばぶんの方々に感謝です。(2025 | 参加者)

あめんばたのしかった。すこしまちがえた。たのしかった。(2025 | 参加者)

本当に誰のことも排除しない、いい環境ができていると思うのでその空気を維持しつつ新しい人が入ってくことで循環していけばいいと思います。(2025 | アシスタント)

財団職員の声



坂元 優

公益財団法人茨木市文化振興財団

上田久美子

公益財団法人茨木市文化振興財団

小学生の頃、行事の前はワクワクしてよく眠れず、当日はソワソワして早起きするような子どもだった。忘れかけていたあの気持ちを、このプロジェクトに携わるようになって何度も思い出す。

みんなに会うのが楽しみで、稽古の日は、早く起きてしまうのは、ここだけの話。公演の日は、しばらく会えなくなると思って、実は少し寂しくなる。

これまで仕事のことは、家族にも友人にも、ほとんど口にしたこともなかったが、気が付けば聞かれてもいないのにアツク語っている自分がある。幾重にも重なった鎧のようなものを少しずつ脱ぎ捨てて、子どもの頃の軽やかさを取り戻しているような感覚がある。

今回取った参加者アンケートで、誰かが、ダンスで会う人たちを「親戚のよう」と表現してくれた。互いを信頼し、安心を感じられる関係性の中に、自分も身を置くことができる幸せに、日々只々感謝している。

5年経った今も稽古は毎回、学びに満ちている。自分の至らなさに情けなくなって、くよくよして、泣くこともよくある。現場にいるのに、どこかで読んだ情報に憑りつかれ、頭でっかちになることもある。判断に迷う時は、誰かにすがって、答えを教えてほしいと思ってしまうこともある。

それでも私は、みんなと共に考え続けたい。みんなが一瞬でも心を解放し、自分を表現できる場を継続させていくにはどうすればいいか。公共ホール主催の事業として、このプロジェクトを本当に必要とする人に適切に届けるには、どんな工夫ができるのか。走りながら考え続けたい。

そしてこれからも、みなさんとあの場で、出会い、共に心を震わせていきたいです。



最初にその場に立ち会ったとき、私は考えるより先に、心を動かされていました。障害の有無や年代に関係なく人が集い、身体を動かし、楽しそうに踊っている。その光景を前に「ここで何が起きているのだろう」と戸惑いながらも、自然と目を離せずにいた自分を覚えています。文化事業の現場に関わってきましたが、あのとき感じた空気は、これまでとは少し違っていました。

それは「娯楽」や「余暇活動」という言葉だけでは言い表せない時間でした。立場や背景の異なる人たちが、同じ時間と空間を共有し、それぞれのペースでそこに居る。その当たり前でいて簡単ではないことに、文化芸術の場で向き合おうとしている。その姿に、この取り組みの可能性を感じたのだと思います。

もちろん、最初から確信があったわけではありません。立ち止まって考えることもあれば、無我夢中で進んだ時期もありました。うまくいくことも、いかないことも含めて、いつもスタッフ同士で話し合い、「この場にとって何が大切か」を考え続けてきました。その場をともにした人たちと、同じ時間を重ね、影響を受け合ってきた経験が、気づけばこの取り組みを形づくっていました。

参加者やご家族から「ありがとう」と声をかけられることの重み。大学での連携が終わり、社会人になった今なお、公演を観に来てくれる学生たちの存在。そうした一つひとつが、私にとって大切な財産となり、この仕事を続ける力になっています。

この場が、誰かににとって安心して居られる場所であり、関わる人それぞれが何かを持ち帰れる場であれと思います。これまで関わってくださったすべての方への感謝を胸に、これからも答えを急がず、その場に生まれる声や変化に耳を澄ませながら、関わり続けていきたいと思っています。

評価検証・運営の流れ



観覧者や参加者へのアンケート調査、ヒアリング調査の結果を分析し、事業を総括します。
また、2025年度の公演後、振り返りと公開評価を兼ねて開いた「カタリ場の場」の様子、
1年間の運営の流れについてご紹介します。



検証調査を元にした事業の総括

大澤 寅雄 合同会社文化コモンズ研究所代表 / NPO法人CASK

「みんなでダンス in Ibarakiプロジェクト」でこれまで収集してきた公演観覧者や参加者等へのアンケート調査の分析と、参加者や関係者に対するヒアリング調査を行い、それらの検証調査の結果をもとに、事業を総括します。

1 アンケート調査

このプロジェクトの発表公演での観覧者を対象としたアンケート（2020～2025年度で回答者数319件）の主な結果から、年齢層は「65歳以上」が、在住地は「茨木市」在住の割合が年々増加していること、財団主催公演に「年に1～5回」来たことがある割合が増加していること、公演の満足度は「大変良かった」が6～7割前後で推移していることが分かりました。

本事業の参加者を対象に公演後に行ったアンケート（2022～2025年度で回答者数82件）の結果から、子どもからお年寄りまで幅広い年齢層が参加していることで「様々な年齢の人と関わることができた」ことが達成されたという意見が最も多く、参加して「とても良かった」割合は8割前後で推移し（図1）、今後の参加意向も8割となっています。

さらに、参加者にはワークショップで「感じることや改善してほしいことなど」についてアンケートで聞いており、自動でキーワード抽出を行うAIテキストマイニングで自由記述の回答（記述件数374件）を分析したところ、「楽しい」「うれしい」「なじみやすい」といった言葉が数多く出現（図2）していることに加えて、「単発ワークショップ」では「温かい」「気持ちよい」といった心情に関する形容詞が多く出現する一方で、「稽古」では「がんばる」「変わる」といった能動的な動詞が多く見られました（図3）

単発WSにだけ出現	気持ち良い やわらかい あたらしい なじみやすい なにげない きつい やりやすい うまい ワークショップ 汗 ストレッチ 最後 心地 12月 ふう 二人 感動 残念 まま 過ごす 抜ける はじめまして
単発WSによく出る	すばらしい 温かい こわい 参加 皆さん ペア 緊張 久しぶり 一緒 コミュニケーション 公演 心 自由 気持ち ワーク 皆 感じる 動かす
両方によく出る	楽しい 良い うれしい 難しい 面白い 新しい ほしい すごい 多い 強い ダンス 動き リズム ちゃん ブループ 身体 リズム 最初 前回 素敵 苦手 できる 踊る 動く 入る くださる すぎる ありがとう
稽古によく出る	好き 楽しみ シーン メンバー 作品 頭 今回 思う がんばる わかる 覚える 考える 動ける 楽しむ 作る 休む 言う もらう いただく 出す 入れる いく 終わる
稽古にだけ出現	早い 不安 流れ タイミングお願い 声 練習 いける 変わる 教える 書く あふれる いやす 上げる 向ける 困る 座る 思いつく 歩く 知れる 行く 聞き取る 見える 起こす 進む すいません ヤッター

図3：単発WSと稽古での記述された単語
（文字色 ■形容詞 ■名詞 ■動詞 ■その他）

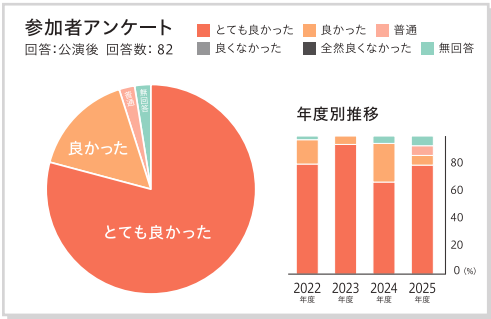


図1：参加者の満足度



図2：参加者の自由記述で出現する単語
（文字色 ■形容詞 ■名詞 ■動詞 ■その他）

2 関係者の座談会

プロジェクトの関係者（ダンサー・俳優、大学生、大学教員、救護班、茨木障害フォーラム、財団職員）が一堂に会し、座談会形式で過去5年間の成果と課題について意見を聞きました。これまでの成果については、障害の有無や年齢に関わらず「誰もが歓迎される場」に参加者が喜びを見出し、プロジェクトを「自分の居場所」と捉えて、振付・演出を担当する森田氏だけでなく参加者が主体的に場を創り上げているという意見がありました。

一方、今後の課題としては、事業規模の拡大に伴い必要なマンパワーが増加し、財団職員だけでは賄いきれないこと、プロセスを重視するこのプロジェクトの評価方法や、他への汎用性を示すことや毎年新規性を問われる助成金獲得の難しさといった指摘がありました。その上で参加者や保護者がこの事業を「居場所」と強く認識しており、継続への強い意欲を共有しました。



3 ヒアリング調査

参加者のヒアリングでは、障害に対する周囲の理解、寛容さ、心理的安全性のある場を、みんなで作っている状況が伺えました。この場では「迷惑をかけてもなんとかなる」と思えることや「癒される」「心地よい」、参加者やスタッフとの関係性が「親戚のように感じられる」といった声が聞かれました。

参加者の保護者からは、対人関係の小さな変化から「心の光」や「奇跡」と感じられるような大きな変化まで、様々なエピソードが聞かれました。具体的には、ここで初めて出会った子どもと目を合わせて笑みを交わすようになったことや、公演を契機に進路希望が具体化し、生活訓練や就労支援に通所するようになったことが挙げられます。

ダンスの振付アシスタントからは、子どもたちの変化や成長だけでなく、アシスタントとして「自分が楽しむ」視点への転換で、監視的な役割から共に参加するスタイルへ移行し、参加者との距離が縮まり、サポートの質が向上した実感が語られました。

救護班からは、医療従事者として自身にも学びや気づきがあるという意見がありました。病院での経験だけでは得られない視点に触れ、自身の知識不足を痛感したことや、障害があっても地域で楽しく過ごす姿が見られることに大きな価値を感じているという声がありました。

4 総括

「みんなでダンス in Ibarakiプロジェクト」の参加者は、障害の有無に関わらず高い満足度と今後の参加意向を示しており、単発のワークショップでは「誰もが歓迎される居場所」、発表に向けた稽古は「変化や成長が促される場所」となっています。また、参加者を支援する側にも障害に対する学びや気づきが得られる貴重な機会であり、「支援する／される」関係を転換させています。今後、この成果をさらに地域へと広げるためにも、人的体制や財源などの事業の安定した基盤を整えて継続することが期待されます。

保護者の声

スタッフの継続的な声かけで安心が生まれ、練習が楽しみに。公演を契機に進路希望が具体化し、生活訓練や就労支援に通所するようになった

彼女はここに来たことがきっかけで進路を言えし、本当に光という奇跡を与えていただいた場です

保護者の子どもではなく、ここで初めて出会った子どもとの（言葉ではなく目を合わせて笑みを交わすような）コミュニケーションに喜びを感じている

本当に微々たる成長ですが、ちょっとずつ対人関係ができてきているのかなど。〇〇ちゃんのお母さんにも笑顔を見せるようになりました



「カタリ」の場 でのグループトーク



「みんなでダンスin Ibarakiプロジェクト2025」の発表公演を終えた翌月、「カタリ」の場 みんなで育てる ダンスコミュニティを開催しました。参加者とその保護者、福祉・医療関係者、大学教員、市の文化振興課職員、その他、プロジェクトに関心のある方々で合計26人の参加がありました。

最初に活動を振り返る記録映像を視聴し、前述した検証調査の結果を共有したあと、5組に分かれてグループトークを行いました。このグループトークでは前半と後半でグループを変えて、前半は検証調査の結果を見て各自が賛同、共感したこと、意外だったことや違和感を感じたことについて自由に語り、グループリーダーが意見を付箋紙に書いて模造紙に貼りました。



後半は、模造紙に貼られた付箋紙を見て、類似や共通の意見を整理・分類してキーワードを模造紙に書き加えました。その後、後半のグループリーダーから、模造紙を見ながら主要な意見を全体に共有していただきました。例えば、以下のような意見がありました。

身体を動かすことで心も動くなど、参加者の内面にポジティブな変化が多く見られた。

単発ワークショップと発表公演が相互に好影響を与える「循環」が生まれている。

普段話さない子どもがダンスについて話すなど、ダンスを通じて親子関係が変化した。

「意識の変容」と「行動の変容」が同時に起きるのはアートならではの価値である。

「なぜ男性は踊らないのか」という問題が提起され、世代やジェンダー差が背景にある可能性が示唆された。

実は今回の「カタリ」の場は、受益者を含めた利害関係者が、評価のプロセスに参加することでプロジェクトを理解し、当事者意識を持って事業の改善に貢献することができる評価手法である「参加型評価」を試みたものでした。多様な属性や立場の方がともにテーブルを囲んで語り合うことで、このプロジェクトの多面的な価値が言語化され、共有できたのではないのでしょうか。

みんなで作るダンス公演

2025
年度

『そこから、これから、はぐくまれしもの』

2025年12月6日

茨木クリエイティブセンター・センターホールにて2025年度公演の幕が上がりました。

同年9月から始まった稽古や舞台美術、衣装づくりとともに、本番の様子をお伝えします。





森田かずよさん🍷
みんなで
つくるダンス公演
障害のある人もない人も一緒に踊ろう

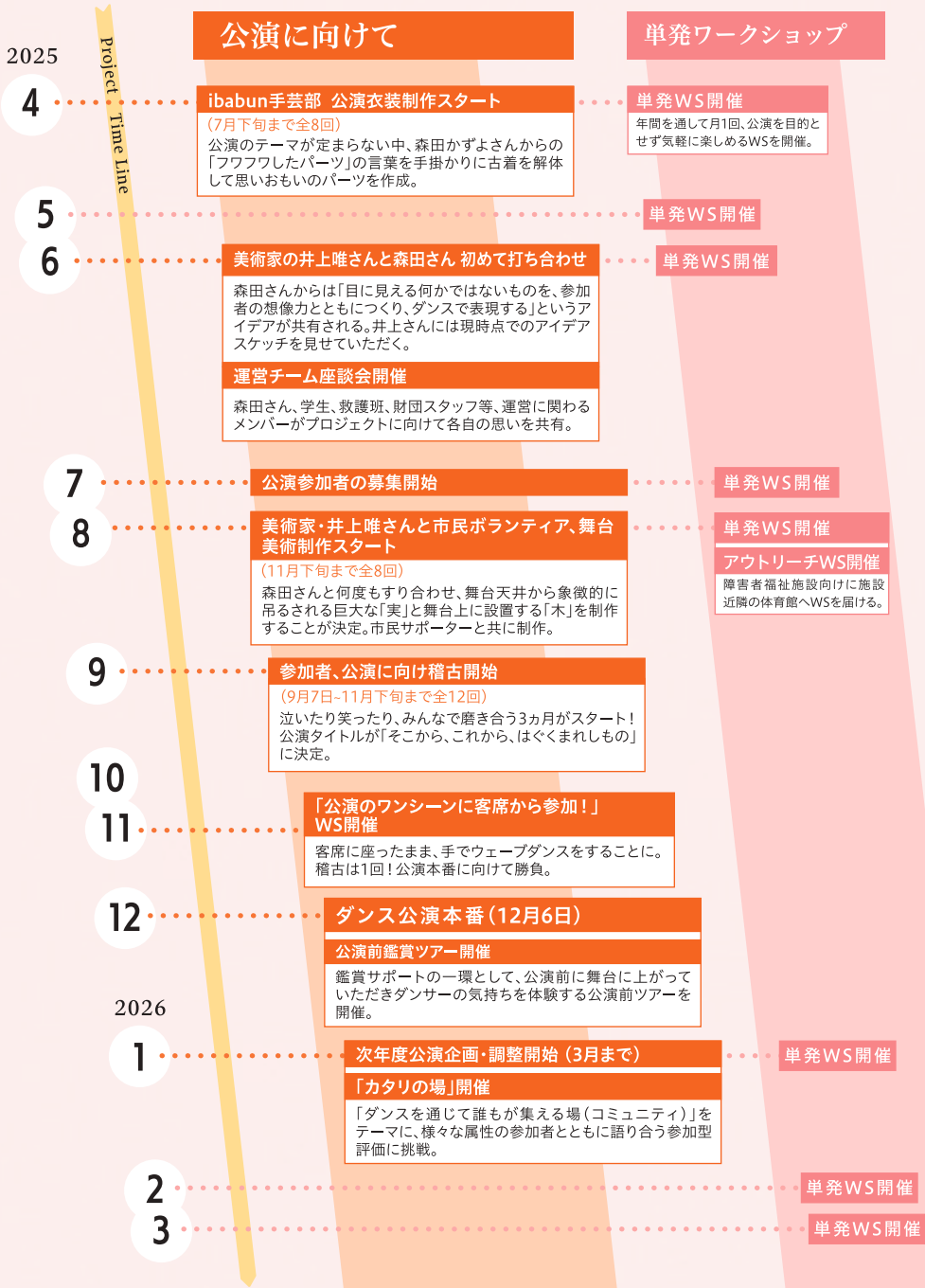
そこから、これから、

はぐくまれしもの

2025年度公演

プロジェクト1年間の歩み（2025年度）

3カ月の稽古を経てステージでダンスを披露する「みんなで作るダンス公演」と、月1回気軽に参加できる「単発ワークショップ(WS)」の2本立てで、年間を通してプロジェクトを運営。毎年少しずつ新しい活動を取り入れながらプロジェクトをアップデートしています。



公演に向けての稽古



公演 2025年12月6日(土)
稽古 2025年9月~11月(計12回)



2025年度、ダンサーとして集まった市民の皆さんは小学生から90代までの28名。舞台という共通の目標に向かって、互いを知り、違いを尊重し、そして共に創作する3カ月が始まった。

リピーターは全体の約7割。リピーターばかりで「新しく来る人が入りづらいんじゃないの?」という声も時々あるけれど、大丈夫。何か困ったことがあってもそっと誰かが寄り添ってくれる、なんともいえない優しい空気がここには流れている。

森田さんの演出は、振り付けありき、ではない。「一人ひとりの身体が出すものが正解」という一貫した信念のもと、稽古で参加者と実際に会って、踊って、個々の身体の特徴、動きを確認してからが、創作の本番となる。

稽古中盤、公演タイトルが『そこから、これから、はぐくまれしもの』に決まる。井上唯さん監修の舞台美術作品のひとつである、巨大な「実」が、舞台中央に象徴的に吊られることも決まる。この「実」の中に、何が入っているのか。この「実」をみんなで、どうはぐくむのか。参加者同士で意見を出し合いながら、それをダンスにしていく。

創作中は、泣くことだって、時には衝突することだって……結構ある(そりゃそうだ、みんな真剣なんです!)。でも、そういう本音と本音のぶつかり合いこそが、この公演の醍醐味のような気がする。

障害の有無、ダンス経験、年齢、性別、そういうものが段々と溶けてきて、段々と意味をなさなくなってくる。自分とは違う一人ひとり。その違いを、一人ひとりが少しずつ受け入れて、すり合わせて、そして、みんなで公演という同じ目標に向かって歩いていく。

2025年度も、泣いたり笑ったりの濃密な3カ月の稽古を経て、みんなで公演本番に臨んだ。



2025年度の取り組み

ダンスの公演だけど、ダンスに興味のない人にも観に来てほしい！毎年そう願いながら、どうすればプロジェクトの裾野を広げられるのか、試行錯誤しています。2025年度の公演では、裏方としてプロジェクトを支えてくださる方々と3つの取り組みにチャレンジしました。

1 美術家とつくる舞台美術

2025年度は5年目にして初めて「舞台美術」を配置することにした。ただ配置するだけではない。美術家に制作してもらうだけでもない。美術家と市民ボランティアサポーター共同の制作に挑戦することにしたのだ。演出に柔軟に沿い、かつ、市民に優しく寄り添いながら丁寧に制作を進めてくださったのは美術家の井上唯さん。市民にとってプロの美術家と直接触れ合うことのできる貴重な機会となった。舞台天井から吊るされた縦3m×横1.5m程の巨大な「実」。そして、舞台上に設置された「木」とそこに咲く「花」の輪っか。竹で枠を作り、古着を割いたもので網目をつくるという完全手作業を、市民ボランティア20人と全8回で行った。一人ひとりのダンサーが様々な色や大きさの「花」を持って舞台上に登場し、満開の花を咲かせた最後のシーンは、公演のタイトルにある「はぐくまれし」瞬間のまさに集大成。クライマックスにふさわしいシーンとなった。



Photo:YO LO

【監修・制作】井上唯(美術家)

1983年愛知県生まれ、滋賀県在住。
近年の展覧会・プロジェクトに「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2024：アケヤマー秋山郷立大赤沢小学校ー」(新潟／2024)、「井上唯／ITONAMI: 風景に向かって旗をかかげる」ギャラリーノイエ(長野／2023年)。2024年度は年間を通して茨木市に通い、フィールドリサーチをベースにした「HUB-IBARAKI ART PROJECT」の招へい作家として活動。

【制作】ボランティアサポーターの皆さん

あーちゃん、あき、あきちゃん、一宮、うし、かずえ、かめちゃん、くーちゃん、こんちゃん、さっちゃん、ジュリ、ともちゃん、ともみ、ひこちゃん、HIRO、松永年文、マヨ、みもぞ、ゆみ、りさ



2 ibabun 手芸部による舞台衣装

財団主催公演の舞台衣装、小道具などを制作することを目的に発足した「手芸部」の部員11名の皆さんに、2024年度に引き続き、公演で使用する衣装制作を依頼。4ヵ月全8回の部活で28名分の衣装を制作した。制作を開始する前に、部員の皆さんに伝えられたのは、森田さんからの「フワフワしたパーツがほしい」というヒントのみ。制作を開始した4月はダンサー募集もしていない段階で、テーマも人数もまだ何も決まっていなかったからだ。今後の演出の意図に合うかどうか、不安を抱えながらも、部員同士励ましあって作業。公演当日、祈るような気持ちで客席からダンサーを見守った部員の皆さんからは、衣装を着たダンサーたちの弾けるような笑顔を見て「安心して泣きそうになった」「衣装が舞台美術と調和していてよかった」との感想をいただいた。衣装制作も2年目になり、このプロジェクトを確実に自分事として捉えてくださる部員の皆さんは、プロジェクトを陰で支える頼もしいパートナーとなっている。

【制作】ibabun 手芸部

あき、いくちゃん、一宮、かずえ、かめちゃん、くーちゃん、さっちゃん、とみちゃん、ハル、HIRO、マヨ

3 ワンシーンだけ公演に参加

公演に向けた長期間の稽古が肉体的にも精神的にも負担であるという声を受け、2025年度は単発で気軽に公演参加が叶う場として、客席に座ったまま公演のワンシーンに参加できる「1 DAYダンスワークショップ」を開催。15名が参加した。出演は、公演のクライマックス直前。真っ暗な客席に突如、照明が当たり、中央を縦に並んだ参加者が、手でウェーブダンスを披露した。客席の参加者の「手」で、舞台上に吊るされた「実」にエネルギーを送るという演出は、のちの舞台上に「花」を咲かせるシーンの前の象徴的なシーンとなった。たった1日のワークショップで、本番に臨むというスケジュール自体に心配もあったが、参加者からは「ワンシーンだけでも公演に携わることができ、貴重な経験になった」とのご感想をいただいた。

【出演】

金世理、ぱぱ、浜田きよみ、
京都西山短期大学共生社会学科 学生





『そこから、これから、はぐくまれしもの』



はじまりのご挨拶



「あいうえお」の世界へようこそ

ここでの日常①

あそこには何が？

行きかう人々

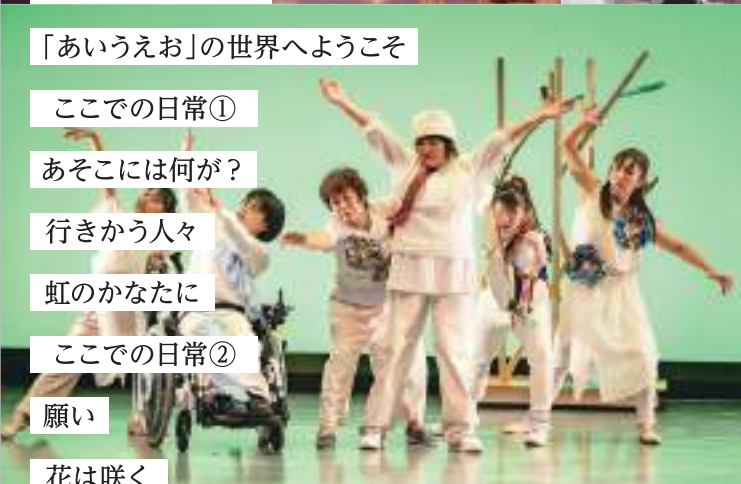
虹のかなたに

ここでの日常②

願い

花は咲く

エンディング



STAGE REVIEW

みんなでつくるダンス公演『そこから、これから、はぐくまれしもの』

森田かずよさんを振付・演出に迎え、一般から出演者を募ってダンス作品を創作する「みんなでつくるダンス公演」が去る12月6日(土)、茨木クリエイティブセンター・センターホールで開催された。今回で5年目となる本プロジェクトは一昨年から文化庁委託事業に指定され、今年度も「令和7年度障害者等による文化芸術活動推進事業」として実施された。毎年9月から12月にかけて12回にわたるリハーサルを重ね、12月の初旬に本番を迎える恒例の事業だ。

自らが障害をもって生まれダンサーとして多方面で活躍する森田さんを中心に、参加する市民のダンサーたち、経験値をもつダンスアシスタント、共同作業者となる他のジャンルのアーティスト、協力する複数の大学のゼミと学生たち、看護、医療側からのケアにあたる救護要員、ボランティアのサポーターなど、多方面の人々の関わりが年ごとに分厚い層となってプロジェクトを支えている。以下に公演当日の舞台の様子を振り返ろう。

幕が上がると白い服に身を包んだ総勢28名の出演者が舞台上に立ちおり、森田かずよさんが観客に向けてあいさつの言葉を述べる。ダンス作品「そこから、これから、はぐくまれしもの」は、森田さんの「ミュージック、スタート!」の声、「オー!」と応じる28名の声とともに開始した。最初に毎回のリハーサルで行っていたという準備体操が再現され、「腿上げします」「首を回します」と森田さんが動作の指示を出すと、ダンサーたちとともに客席の人たちも一緒に体を動かした。

続いて「あめんぼ あかいな あいうえお、、、」と、北原白秋の「五十音」が朗読される。わらべ歌のような素朴な詩句が読み上げられると、ダンサーたちは音や語句のイメージを動きにして表現する。「ささげに すをかけ さしすせそ」の「さ行」では「さーっ」と声を出しながら吹く風のように、「わいわい わっしょい わいうえお」では「わっ!」と驚かすような動作をする。ダンサーたちの童心に返ったユーモラスな演技が楽しい。体操も「五十音」も、動きや言葉の原点に立ち返り、「そこから、これから」私たちのダンスを生み出すのだと、作品タイトルに込められたメッセージが伝わってくるようだった。

様々な身体をもつ人たちがダンサーとして参加している。車椅子を使用する人、目には見えない障害をもつ人、学童期の子ども、高齢者、外国にルーツをもつ人。それぞれの異なり方のままに対等に関わり合う社会のあり方がダンス表現の形を借りて実践される。ステージ中央の上方には大きなたまごの形のオブジェが吊るされている。カラフルな編み物で覆われたこの作品は、舞台美術を担当した美術家の井上唯さんの手によるものだ。その下に集う人々の繋がり象徴となる、今作のシンボルといえる。たまごの形には生命の源泉の意味も込められている。

そんなダンサーたちはシーンごとにさまざまな組み合わせの集団を作り、身振りや踊りをバラエティ豊かに繰り広げた。6、7人ほどのグループがそれぞれ動物の動き、農作業のような動作などをマイムで真

似るシーンは何らかの物語を描いているようだ。一斉に行う「乾杯!」の動作からは威勢のいい声が聞こえるようだった。小さい子どもや若者の集団がしゃがんだ姿勢でトコトコと一列になって登場し、たまごのオブジェを見上げると、年上の大学生にリフトされた女の子がオブジェに向けて声を上げる。さらに床を走ったり転がったりする不思議な情景が描かれ、一列で去っていくが、最後の一人になった少女が客席にうやうやしくお辞儀をすると拍手が起きた。これらのシーンは必ずしも意味や内容を分かりやすく伝えるわけではないが、稽古の中で偶然生まれた動きを生かしているようにも見受けられる。一人ひとりの出来事や経験が動きとなって現れるのがダンスであり、分かりやすい物語や説明はなくとも、イメージや感情が身体の言語で表現されている。

ラテン風の軽快な音楽が鳴ると、左右の舞台袖から一人ずつ同世代の女性が登場、リズムカルなステップでデュオを踊り、それぞれの方向へ去っていく。続いて車椅子の女性と澁刺と動く女性、10代前半の若々しい二人組など、様々な顔合わせの二人がデュオを踊る。個と個が出会い、心を通わせ、それぞれの道を進んでいく人生を活写するかのようだ。別の場面でも10人ほどの人々の集団が二人ずつの組に分かれて踊るシーンがあった。5組のデュオが向かい合って手を合わせ、身体を通して対話する。大人と子ども、車椅子の人と(いわゆる)健常者、異なる身体をもつ人と人が互いを受け入れコミュニケーションする様子が、優しい音楽と青い照明の中で穏やかに繰り広げられ、印象深い。

毎回、作品には振付・演出の森田かずよさんのソロ・ダンスが組み込まれている。今年は往年のナンバー『虹の彼方に』のピアノとベースとジャズ・ボーカルのバージョンを音楽に選び、ボーカルの情感に身を預けるように、ゆったり、たっぷりと腕をなびかせながら踊った。「Somewhere over the rainbow.....」と歌う歌詞のように、高く遠くへ手を伸ばし、何かにあいさつを送るような動きが、紫色のホリゾントのライトと相まって美しい。

美術家の井上唯さんはたまごのオブジェのほかにもう一種類、丸く輪にした竹ひごの枠に組紐の手法で花のようなモチーフを施した美術作品(「わっか」と呼ばれる)を考案し、多くのボランティアサポーターによって制作された。これをダンサーたちが手に持ちながら踊るシーンも見応えがあった。ここでは舞台と客席との交流がはかれ、舞台上には椅子に座した高齢の女性と車椅子の女性が、客席には中央前方に縦の列に座った京都西山短期大学共生社会学科の学生たちが、それぞれ両手で「わっか」を掲げ、交信する。やがて他のダンサーたちも「わっか」を手にして舞台に入ってくる。フロアに広がり思いつくように「わっか」を掲げ、ゆるやかに左右に揺らすと、大小の白い組紐の花が咲き誇るシーンが生まれた。これが本作のフィナーレとなり、それぞれの身体、それぞれの生きてきた時間、一人ひとりの異なる存在と等しい生命の重みを舞台上に映かせて、今年の「みんなでつくるダンス公演」が幕を閉じた。

バリアフリー対応



練習から本番当日まで、参加者や鑑賞者に向けた取り組みをご紹介します。

参加者(ダンサー)に向けて

- ・車椅子での参加
- ・補助犬と一緒に参加
- ・手話通訳等の手配
(茨木市障害福祉課に協力を要請)
- ・筆談器設置
- ・休憩室の利用
- ・練習中出入り自由
- ・救護スタッフ帯同

鑑賞に不安のある方に向けて

- ・点字プログラムの配布
- ・ヒアリンググループの利用
- ・ロビー、チケットカウンターに筆談器設置
- ・講演、トークセッションでの手話通訳、要約筆記
- ・公演中の入退場自由
- ・オストメイト対応トイレ
- ・気分がすぐれなくなった方のための休憩室
- ・車椅子のままご覧いただけるスペース
- ・補助犬と一緒に観覧

鑑賞ツアーの開催(開場前)

開場30分前の緊張感高まる中、舞台上に実際に上がっていただき、出演者を紹介したり、舞台上を歩いて広さを感じていただいたり、衣装に触れていただいたりする30分程度の「鑑賞ツアー」を来場者向けに行っています。ダンス公演を少しでも楽しんでいただくための工夫として、毎年、ドタバタと、数々の失敗を重ねつつ、試行錯誤しながら運営しています。



鑑賞ツアー(2025年度)

2023 年度 市内の視覚障害者団体に協力を要請。視覚障害者と補助者の方、計8名に対し、開演前鑑賞ツアーを開催。また、公演中は通訳者が帯同し、舞台上でどのような動きがされているのかを口頭で実況した。視覚障害のある方にもダンス公演を楽しんでいただきたいという純粋な思いから企画したものの、演出家の意図を的確に説明することは予想以上に難しく、通訳者の解釈が多分に入ってしまったという反省があがった。

2024 年度 障害の有無を問わず関心のある方を広く募集。集まった9名に鑑賞ツアーを行った。公演で使用する「楽器」を鳴らしていただき、難聴者の聞こえを支援する「ヒアリンググループ」を試していただくなど、体験に重きを置いたツアーとなった。

2025 年度 障害の有無を問わず関心のある方を広く募集。集まった10名に鑑賞ツアーを行った。これまではツアーは財団職員が担当していたが、2025年は大学連携先の立命館大学の学生がファシリテーターを務めた。「幕が上がった時にダンサーがどんな気持ちになるのか？」を体験していただく試みなど、若者ならではの新たな視点でツアーを企画することができた。

運営スタッフ・大学連携

運営スタッフについて

～ダンスアシスタント・救護班・大学連携～

5年目を迎える本プロジェクト。共生社会の実現を理念に置く、本プロジェクトのような取り組みについて、取り組んでみたいがどのように運営していったらよいのか分からないというお声も、他ホールから届くようになりました。

正直に言います。主催者の私たち財団職員は、始めた当初はどんなプロジェクトになるか、ほとんど想像できていませんでした。完全に手探り状態でのスタート。無知ゆえに、振り返ると恥ずかしいこともしてかしましたし、参加者・関係者に迷惑をかけることもありました。後悔していることも多々あります。

それでもここまで続けてこれたのは、何も分からない私たちがだったからこそ、周りの方たちが助けてくださった、それに尽きと思っています。当初ゼロだったダンスアシスタントは、一人ずつ増員して今では3人体制に。高齢の参加者の割合が増えた3年目からは、医療の視点でケアする人材が必要と感じ、看護師2名に救護班として関わっていただくようにもなりました。また、地域の大学との連携も年を追うごとに増え、2025年度は3校の学生に関わっていただくことができました。



身体を基点とした関係の再編と〈場〉の成熟

～ 共生型ダンス実践における五年間の到達点と課題 ～

森田かずよさん、茨木市文化振興財団、そして私の大学3・4年ゼミ生の協働によるこのダンス公演は、今回の第5回公演をもって、5年間にわたる取り組みに一つの区切りを迎えたと感じている。明確な指標があるわけではないが、実践を重ねるなかで「場」そのものが育ってきたことを実感しているからである。

この取り組みは、障害の有無をはじめとする属性に関わらず、ダンスを媒介に、多様な他者と身体を基点に向き合いながら関係を編み直すことをとおして、共生社会の構築を具体的に探究する試みである。私の立場から見れば、この実践は、ゼミ生が共生の方法を思考し、実践し、再考する経験をとおして、将来、共生社会の実現に主体的に関与する一人ひとりの人間となることを目指す教育実践で

どうしてここまでしてくださるのか。どのスタッフも学生も「仕事」という枠を超え、このプロジェクトにやりがいを見出し、本気で取り組んでくださっています。初年度は森田さん、財団職員2名、そこに連携先の大学の学生がサポーターとして加わるという体制でスタートしたプロジェクトも、上記のように頼れる仲間が徐々に増え、現在に至っています。

また、忘れてはならないことは、5年の時を経て、参加者同士のケアが充実してきていることです。私たちが配慮“しすぎ”なくても、その場はうまく回っていくことを現場で実感しています。5年目を迎える現在も、財団職員では賅いきれない運営上の課題は山積しています。今後は市内の福祉の分野からもご尽力いただき、“みんなで”このダンス公演を支えていく体制を整えていきたいです。

個々の力は小さくても、絶対誰かが助けてくれる！

私たちは、地域の色々な人に会いに行き、みなさんの知恵や助けを借りることに運営のヒントがあると感じています。



草山太郎

准教授／追手門学院大学 地域創造学部 地域創造学科

もあった。この5年間でゼミ生の関与のかたちは変化してきたが、関わってきたゼミ生はいずれも、それぞれの立場で一定の成果を挙げてきたと考えている。それはひとえに、森田さん、茨木市文化振興財団、そして公募で集い、ダンスの場を共にしてくださった参加ダンサー一人ひとりの存在があってこそである。ここに深く感謝したい。

しかし、この事業はまだ途上にある。この場での学びを、ゼミ生の将来の生活や社会との関係にいかにつなげていくのか。その回路をより確かなものとして設計していくことが、私自身の次なる課題である。次の5年に向けて、たとえ一歩でも、いや半歩でも、共生社会の実現に近づき実践を重ねていきたい。

5年間という時を重ねて



ダンサー・俳優

森田かずよ

「みんなでダンス in Ibaraki」は先の見えないコロナ禍を経て、月1回のワークショップに加え、9月から12月は公演に向けたリハーサル、そして公演を実施するという形式を5年間継続してきました。ゆっくりですが、確実に輪を広げてきました。

私はそれまでワークショップのファシリテーターの経験はありましたが、多様な方が出演するダンス公演の演出については経験豊富とは言い難いなか、ここまで長く続けることができていることに感謝しかありません。

最初は全員が一緒に舞台上立つことができるだけでも感無量だったのが、年を重ねるごとに欲がでてきました。

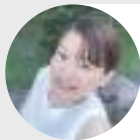
「生演奏で踊りたい」
「関わる人を増やしたい」
「劇場の外へ出たい」
「この場について語る機会をつくりたい」

ひとつずつ願いを叶えていきました。

表向きは「障害のある人もない人も」という言葉を戦略的に用いながらも、この場では、ダンスを通じて、参加者それぞれが、その人が持つ差異や特性を理解しあい、向きあい方を探り、お互いを尊重しあっています。とても自然な空気です。

言葉にすると語弊を生みそうですが、私はこの場において、どこか頼りなくしたいと思っています。ワークショップのナビゲーターをし、公演の演出・振付と最終的な責任は背負いますが、私自身が誰かの助けがないと生きていけない存在であることも含めて、この場では私自身が開示できているのだと思います。それはきっと、参加者、アシスタント、文化振興財団の方々、ケアスタッフと、とてもいい関係と環境が築けているからです。

私はここに来る人たちと、表現と身体を通して、繋がっていきたくて考えています。この場での関わりや時間が、ここを離れたそれぞれの時間の中で、少しでも生きやすさや、新しい挑戦への余白を生んでいるのだとしたら、こんなに嬉しいことはありません。



プロファイル
森田かずよ

先天性の障害を持って生まれ、18歳より表現の世界へ。ダンサー、俳優として活動。国民文化祭、庭劇団ペニノ、アジア太平洋障害者芸術祭など国内外の多数の公演に出演。東京2020パラリンピック開会式ソロダンサー。NHKドラマ『パーセント』出演。近年は障害のある人を含めた多様な人とのワークショップやダンス公演の演出を行う。福祉をたずねるクリエイティブマガジン「こここ」にて「森田かずよのクリエイションノート」を連載中。現在、大阪大学人文学研究科博士後期課程在籍中。「Performance For All People.CONVEY」主宰。NPOピースポット・ワンフォー理事長。

みんなでダンス in Ibaraki プロジェクト

みんなでつくるダンス公演『そこから、これから、はぐくまれしもの』



演出
森田かずよ

出演者

<一般公募>あやのん、岩原帆南、かおり、垣見ゆき子、梶田純江、上沢聡子、上沢史香、河内千春、かほ、ケイ、しーちゃん、しおり、じゅんこ、田中敦子、たにゆみ、でんちゃん、久生悦子、藤原美加、みるちゃん、ももね、ゆか、よいちゃん、りさ
<学生>そうま、りょうや

舞台美術

監修:井上唯(美術家)/制作:井上唯、ボランティアサポーター:あーちゃん、あき、あきちゃん、一宮、うし、かずえ、かめちゃん、くーちゃん、さっちゃん、とみちゃん、ハル、HIRO、マヨ

衣装

ibabun手芸部:あき、いくちゃん、一宮、かずえ、かめちゃん、くーちゃん、さっちゃん、とみちゃん、ハル、HIRO、マヨ

ワンシーン出演

金世理、ぱぱ、浜田きよみ
京都西山短期大学共生社会学科学生13名

ダンスアシスタント

安藤真弓、乾光男、藤原美加

救護

とと、うし

公演前鑑賞ツアー

中濱佑太(立命館大学)

宣伝美術

本村信裕 (STUDIO GIGI)

映像

久保田テツ (npo remo「記録と表現とメディアのための組織」/福山大学)

舞台写真

井上嘉和 (株式会社井上写真事務所)

WS記録写真

中濱正善、浦谷光 (芸術美術協会)

評価検証

NPO法人CASK

舞台監督

下野優希

舞台スタッフ

株式会社毎日舞台
山口敏次(舞台)、加根拓郎(音響)、中川亮太(照明)

制作

公益財団法人茨木市文化振興財団
落合佳人、上田久美子、坂元優

主催

文化庁、公益財団法人茨木市文化振興財団

後援

茨木市、茨木商工会議所、茨木市観光協会

協力

追手門学院大学 地域創造学部 草山ゼミ
立命館大学 映像学部 望月ゼミ
関西大学 総合情報学部 川島ゼミ
京都西山短期大学 共生社会学科
茨木市立障害福祉センターハートフル
茨木障害フォーラム

〈文化庁委託事業〉令和7年度障害者等による文化芸術活動推進事業

記録冊子『5年間の歩み』

発行・企画:公益財団法人茨木市文化振興財団

アートディレクション:森本アリ

デザイン:本村信裕 (STUDIO GIGI)

編集:柿本康治